解説

Mさんとこのようなやりとりを繰り返すうちに、私はがん告知の捉え方を大きく変える3つの発見をしました。

その1つ目は、進行がんと知った患者さんの心の動揺も、自分はもう死ぬのかという質問も、実際に体験してみると決して対応できないことではなかったという発見です。これらはそれまで、がん告知をしようとするたびに私を萎縮させ、告知をできなくさせていた事柄です。これらの事柄にひるまず応じることができたのだから、病名を告げられた患者さんの反応も何とか受け止められるのではないかと思いました。

2つ目は、がん告知は、長いがん治療の中の通過点にすぎないという発見です。がん告知は病名を伝えた時点で完了するのではありません。がんという疾患は、症状も進行速度も治療効果も個人差があり、その全容は時間が経過しなければ伝えられるものではありません。来る日も来る日もMさんに病状説明をしながら、自分は毎日がん告知をしているようなものだと思いました。最初の病名告知は口火を切るステップにすぎない、そこを通過するのは

容易ではないが、後のステップはもっと大変だ、最初に行う病名告知だけをことさら高いハードルと捉え、その前で立ち止まって躊躇することは意味がないのではないか、と考えるようになったのです。私の心の中で、告知の占める位置が大きく変化しました。

そして3つ目の発見は、がん告知に最も必要なことは、医師が患者さんに共感し、病名を伝えた後に起こることを逃げずに受け止める心構えを持つことである、ということです。これに気づく前の私は、がん告知には何か特別な、それを使えば容易に病名を伝えることができる言い方があるはず

がん告知の捉え方を大きく変えた3つの発見

1. 患者さんの心の動揺も質問も決して対応できないことではない
2. がん告知は長いがん治療の中の通過点にすぎない
3. がん告知に必要なのは告知後に起きることを受け止める心構え

**がん告知は容易ではないが
患者さんを最後まで支えていこう
という心構えがあれば
決してできないことではない！**